



©Sameer Al-Abdullah

中西あゆみ

フォトグラファー

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。現在ドキュメンタリー映画を制作中。

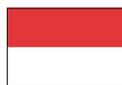


Part II

世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが「世界の子どもたちの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文 中西あゆみ



インドネシア

ジャカルタに生きる＝伝統

近所のモスク(礼拝場)でラマダン中の祈りを捧げるセティアブディ村の住人たち。男性はなかで、女性はなかには入れないので脇の道路にカーペットを敷き、ともに祈る。



割礼後は家でお祝いが催される。親族や友人がラマくんを訪問。本人にご祝儀を手渡し、痛みに耐えるラマくんを励ます。



割礼を受け、驚きと痛みに泣き出すラマくん(8才)。伝統手法では竹のナイフで包皮を切り取る。施術時間わずか1秒。



陽が沈み、ともに祈りを捧げる近所の子どもたち。その後、一日断食後初の食事を一緒にとる。セティアブディ村では多くの子どもが自らブアサをした。

今年のラマダン開始は7月20日。毎年ムスリム信者はイスラム暦の月に従い、30日間の断食をします。日の出から日没まで飲食を絶ち、禁欲に励みます。日中は水の一滴も口にしません。厳格な信者は自分の唾をも吐き出すほど。ブアサ(断食)中の生活は、日が昇る4時15分頃までに朝食を済ませ、お祈りをしてからはじまります。仕事のある人は出勤し、主婦は家事に追われ、学校も普段通り。小学生以下の子どもと妊婦はブアサをする必要がなく、生理中の女性はやってはいけませんが、足りない日数は、後に振替が可能です。

「腹が減っては戦はできぬ」ということわざがありますが、ブアサ中は逆。強靱な精神と忍耐力を鍛えるため、お腹が空いても働くことが望まれます。イライラしないように、親切に。慈悲の心を持ち、恵みに感謝し、自身を悔い改める…断食を通し、学びます。

夜中の2時半。「サウル、サウル」という大きな叫び声と太鼓の行進が町を起こして回ります。各家庭では朝

食の準備がはじまり、この日また断食に備える食事をします。同じ頃、大通り沿いには人々が列をなして立っています。ジャカルタでは、自分より恵まれない人に「断食に備えるための朝食を届ける」という文化があります。暗がり、数メートルおきに置かれた大きなゴミ箱に体をうずめ、頭だけを出して食事が届くのを待つ人々。小さな子どもを抱く女性や老人も横に並びます。ゴミ箱を目印に支援を届ける車で道路は賑わい渋滞します。これが30日間続きます。

断食明けを祝うレバラン休暇は、一年で一番出費の多い時期。親族が一堂に会し、思いきり贅沢をします。家の壁は塗り替えられ、子どもには新しい洋服、親兄弟にはお小遣いが渡され、豪華な食事をともにします。テーブルに並びきらないほどのお菓子を用意し、訪問者をもてなします。「心身ともに過ちをお許しください」と自分の行為を詫げる挨拶を交わし、新たな一年がはじまります。

9月に入り、ジャガカルサ区に住むラマくん(8才)が割

礼を受けることに。若いうちに包皮を切り取る割礼は、イスラム圏の男子はみな経験します。レーザーを使うのが一般的ですが、ラマくんは伝統手法で受けます。当日朝5時、クリニックに到着。一人の男性のひざに座らされたラマくん。本当に一瞬のことです。もう一人の男性が、竹のナイフでラマくんの包皮を切り取ります。その早さはまさに神業。本人は一瞬自分に何が起こっているのかわかりませんが、事態を把握した瞬間に体をよじり、泣き出します。その頃には、ほぼ終了しています。その日、ラマくんの家はお祝いに大忙し。招待客は、出血し痛みに耐えるラマくんにご祝儀を手渡し、励まします。

町も、元の姿に戻ります。断食月は終了しても、食事を摂れない人たちが大勢います。チリリタン地区の歩道橋で一日物乞いをする母親。4人の子どもと一緒に、数十メートル先にはまた別の親子が、さらに先には、子どもだけで物乞いする姿があります。ラマダンが明けて一週間、人々は足早に横を通り過ぎて行きました。

ラマダンが明けても貧しい暮らしを強いられる人々にとっては何も変わらない。チリリタン地区の歩道橋で一日物乞いをする母親と、赤ちゃんを含む4人の子どもたち。



チリリタン地区の歩道橋で物乞いをする子どもたち。



パサル・ミング地区にあるトラディショナル・マーケットでは何でも揃う。お母さんと指輪を選ぶ3姉妹。



「サウル」用の太鼓で遊ぶセティアブディ村の子どもたち。断食月には、毎朝2時半に各村の若者が太鼓を叩きながら行進、村人を起こして回る。